

## 教会暦と聖書の流れ

この箇所の前には、イエスが 5 つのパンと 2 匹の魚で 5000 人以上の人の飢えを満たしたという話が伝えられています(マタイ 14 章 14-21 節)。きょうはそれに続くもう一つの不思議な出来事です。弟子たちはこのような体験をとおして、次第にイエスを特別な方、神からの力に満ち溢れた方と見るようになっていきます。

## 福音のヒント

(1) ほんとうにイエスは湖の上を歩いたのでしょうか。聖書に書いてあるのだからそのとおりに違いない、という人もいるでしょうし、どうしてもそうとは信じられないという人もいるでしょう。事実はどうだったのか、と議論してもあまり実りはなさそうです。



この出来事はマルコとヨハネも伝えていますが、ルカは省略しています。なお、マルコやヨハネではイエスが水の上を歩いたということだけで、ペトロが水の上を歩こうとした話はありません。さらにマルコ、マタイ、ルカに共通する「嵐を静める」出来事(マタイ 8 章 23-27 節など)とも似ている面があります。これらの話は誰かが頭の中で考え出したフィクションではありません。何かしら弟子たちにとって不思議な体験がガリラヤ湖であり、それが伝えられていくうちに今の福音書のような物語になったと考えたらよいでしょう。

(2) 彼らが向かった「向こう岸」は、34 節によれば「ゲネサレトという土地」です。異邦人の土地ではありませんが、見知らぬ土地のイメージなのかもしれません。

ある人はこの出来事についてこう考えました。「弟子たちはイエスを残してガリラヤ湖に船出した。自分たちだけで見知らぬ土地に行く不安がある。案の定、逆風にあい、いつの間にか舟は岸に押し戻されていた。イエスは近くの岸辺を歩いてきたが、弟子たちは自分たちが湖の真ん中にいると思い込んでいたので、イエスが湖の上を歩いているのだと思った。」もちろんこんな考えは単なる想像であって、何の根拠もありません。ただ、そうだとでも本質的な意味に変わりはないのかもしれないかもしれません。大切なのは実際の出来事そのものよりも、弟子たちにとってそれがどういう体験だったのか、ということだからです。この体験は弟子たちがイエスは特別な方であると気づく体験だったのです。マタイではこの物語の結びに「本当に、あなたは神の子です」という告白があります。

(3) この物語の中で大切にしたいのは「恐れと疑いから信頼へ」というイメージです。「信じる」はギリシア語で「ピステウオー *pisteuo*」、名詞の形は「ピステイス *pistis*」です。「ピステイス」は普通「信仰」と訳されますが、「信頼」と訳すこともできます。

「信仰」と言う「神の存在を信じる」ことだと考えがちですが、福音書の中で問題になっているのは、「神が存在するか否か」というようなことではありません。問題は「神に信頼を置くかどうか」です。「疑い」とは神に信頼しないこと。神に信頼せず、自分の力だけで危険に立ち向かおうとするとき「恐れ」に陥るのです。

イエスは恐怖のどん底にいる弟子に向かって「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」(27節)と呼びかけます。「わたしだ」と訳されたことばは日本語訳だけ見ていると、「幽霊などではなく、わたしである」と言っているだけのように聞こえるかもしれません。この「わたしだ」は、ギリシア語では「エゴー・エイミ ego eimi」で、英語で言えば「I am」という言い方です。この「エゴー・エイミ」は「わたしがいる」とも訳すことができます。「わたしがいる」は、「わたしはあなたとともにいる」という意味でもあります。「安心しなさい。わたしがともにいる。だから、恐れることはない」イエスは今もさまざまな恐れに囚われているわたしたち一人一人にそう呼びかけているのではないのでしょうか。

また、この「エゴー・エイミ」は、旧約聖書では神がご自身を表すときに用いられた表現(「わたしはある」出エジプト記3章14節)ですから、ここでもイエスが神としての威厳と力を持っていることを宣言している、と受け取ることもできます。

(4) 28-31節はマタイがマルコの伝承に書き加えた部分と考えられますが、マタイだけが知っていた別の伝承があったのでしょうか。このような物語は、イエスの地上での活動中にガリラヤ湖で起こった一回の出来事というよりも、むしろ、復活して今も生きているイエスと弟子の出会い、そしてキリストを信じて歩もうとするわたしたちすべての歩みを表していると考えたらよいでしょう。わたしたちもペトロのように水の上を(あるいは、水の上でなくともイエスに従う道を)歩みたいのです。しかし「強い風」(さまざまな困難)のために「怖くなり」、「主よ、助けてください」と叫びたくなることがあります。イエスはそんな弟子に対して、「すぐに手を伸ばして捕まえ」てくださるといいます。そのようなイエスの助けをわたしたちも感じることもあるかもしれません。また、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」という言葉も、「もっと大きな信頼を持つように」という励ましとして受け取ることができるでしょう。

福音書を読むときに大切なのは、2000年前の出来事として読むだけでなく、今のわたしたちと神(あるいは、復活して今も生きているキリスト)との出会いの物語として読むことです。

(5) 日本のカトリック教会では、8月6日から15日までの10日間を「平和旬間」としています。過去の戦争や広島・長崎の原爆の惨禍を思い起こし、平和のために祈る季節を迎えています。この世界では今もなお戦争やテロが繰り返されています。災害や事故も起こり続けています。身近なところでもわたしたちは暴力や犯罪に脅かされています。本当に平和な世界を実現するのは「水の上を歩く」のと同じぐらい難しいことでしょうか。

「平和」と訳されるヘブライ語の「シャローム」は、「欠けたもののない状態」を表すそうです。神が共にいてくださり、すべての人が神の愛に満たされ、神の恵みがすべての人に等しく行き渡るところに本当の平和があります。その平和はまずわたしたち一人一人の中から始まると言えるのかもしれませんが。